

即刻開悟の鍵 3

スプリームマスター チンハイ

目次

スプリームマスター チンハイのプロフィール 愛の道	5
1 陰陽が平均してこそ仏陀である	11
2 臨終の状況	73
3 黒白神通力	125
4 蛇の虫	187
5 魔の仕事を確認する	231

6

「道」を得た真のマスターの磁場の吸引力は無限である

265

印心―観音法門

.....

305

出版物の紹介

.....

309

私たちへの連絡方法

.....

315

スプリームマスター チンハイのプロフィール…愛の道

スプリームマスター チンハイは、世界的に有名な靈性の指導者であり、芸術家、慈善家であります。彼女の愛の心はあらゆる文化と人種の壁を越えて、世界中の隅々まで届いています。マスターはオウラック（ベトナム）の中部に生まれ、青年期にはヨーロッパに留学し、そこで赤十字に勤務しました。その間、彼女は世界の至る所に、苦難に満ちていることを目の当たりにしました。それで苦難からの救済方法を探し出す決意をし、これが人生の目標となりました。当時スプリームマスター チンハイはドイツ人の医師と結婚していて、幸福な家庭生活を送っていました。別れることは彼らにとって極めて困難な選択でしたが、彼女は最後には、夫の祝福のもと夢を求めて旅立ちました。スプリームマスター チンハイは求道の旅を始め、靈性の開悟を追い求め、最後にヒマラヤで悟りを開いたマスターから、内面の光と音を観るメディテーション法門を伝授されました。これは後に彼女が伝授している「観音法門」です。彼女はある期間、修行に精進し、完全に悟りを開きました。

一九八〇年代に、スプリームマスター チンハイ インターナショナルアソシエーションが発

足されました。そのアソシエーションの主旨はマスターの教理です。そして人々の真摯な要望により、スプリームマスター チンハイは「観音法門」を伝授し、人々に自分の内面の偉大な本質を見付けだすよう、励ましてきました。後にアメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカの五大洲と国連の招聘に応じ、現地に赴き講演をしました。

スプリームマスター チンハイは慈悲にあふれ、貧困弱者に力を尽くして援助しています。彼女の慈善活動は世界のあらゆる境界を越え、世界各地の貧しい人々や、苦しい状況にある老人、受刑者、心身障害者、ホームレス、アメリカの退役軍人たちにまで及んでいます。地球温暖化により、さまざまな危機を誘発している現在、スプリームマスター チンハイは数百万ドルを寄贈して、人道的援助を行うと同時に、インターナショナルアソシエーションのメンバーが世界各地に赴き、被災者を助けるよう指示し、数えきれない人々を助けてきました。その他、スプリームマスター チンハイの愛は、地球上の貴重な友である動物や生態環境にまで及んでいます。彼女の慈悲深い愛は、世界の多くの人々を感動させ、人々に無私の愛の手本を示しました。マスターはまた、絵画、ランプのデザイン、ファッションデザイン、ジュエリーデザインなどの芸術創作活動を通して得た収益を、助けを必要とする神の子たちのために使っています。

近年、スプリームマスター チンハイは三部作を出版しました。「バード イン マイライフ」「ドッグ イン マイライフ」「気高い野生動物」この三部作はいずれも国際的にベストセラーに

なり、さまざまな言語に翻訳されました。これらの本はマスターが霊的なコミュニケーションと洞察力をもって、人類の友である動物たちの情感と考えを記録したもので、動物たちの高貴な精神と無私の愛を表したものです。

また道徳を広め、人々に見習うよう励ますために、スプリームマスター チンハイは二〇〇六年三月に「輝く世界の指導者賞」を設け、後にまた、「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の愛情賞」「輝く世界の誠実賞」「輝く世界の発明家賞」などを設けました。これらの賞の受賞者は個人もいれば、国家や団体も含まれています。彼らは世界に手本を示し、平和と美しい地球の持続的発展のために大きな貢献をしました。たとえば、スロバニア共和国の第二代大統領ヤネス・ドルノウシエク博士、アメリカの第四五代副大統領アル・ゴア（国連気候変動に関する政府間パネルと共同で二〇〇七年ノーベル平和賞を受賞）、国連気候変動に関する政府間パネル議長、インドのエネルギー研究所の所長のラージェンドラ・パチャウリー博士（二〇一〇年に

UN-HABITAT 都市スピーチ賞を受賞）、NASAゴダード宇宙科学研究所主任研究員ジェームス・ハンセン博士（二〇〇九年にロスビー研究賞を受賞）、イギリスの有名な霊長類学者ジェーン・グドール博士です。

スプリームマスター チンハイも「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の知性賞」を人類のよき友である動物たちに授与しました。もって動物たちが危険を顧みず、他の命を助けだした無私で

健全な行動を称え、動物たちの愛に満ちた勇氣と聡明さと思いやりの精神を称えました。

スプリームマスター チンハイは靈的な面だけでなく、物質面でも世界に多大な貢献をしています。彼女自身はいかなる報いも求めていませんが、世界各国の政府や非営利団体は彼女の献身的な奉仕を称えて多くの賞を授与しました。たとえば、二〇〇六年グシ平和賞、二〇〇六年第二七回テリー賞銀賞、二〇〇二年ロサンゼルス・ミュージック・ウィーク表彰状、一九九四年世界精神指導者賞、一九九四年世界市民人道主義者賞などです。この他にアメリカ政府の官僚から、二月二二日と一〇月二五日をチンハイデーと定められました。今でも彼女はこの世界を助けるために全力を尽くしています。数多くの世界のリーダーたちと民衆は、彼女に対し感謝しています。

スプリームマスター チンハイは環境保全の先駆者としても有名です。彼女は智慧と勇氣をもって、気候温暖化問題に対し、警告を發しました。実際、彼女は二十数年前から、すでに環境保全を呼びかけています。彼女が「もう一つの生き方」、「SOS地球温暖化を阻止しよう」という活動を地球規模で展開し、地球温暖化阻止国際会議にも出席し、ゲストとして、基調報告を行い、人々に現在世界的に頻繁に起きている、災害の根本的な原因と解決の道を示しました。それはつまり、慈悲深い、ビーガンライフスタイルです。現在、人々によく知られている「ベジタリアン」になって、平和な世界を創る」これはスプリームマスター チンハイが發案したスロ

ーガンです。

食生活が気候に大きな影響をもたらしていることから、人々に慈悲に満ちた、持続可能なライフスタイルを提供するため、ビーガンレストラン「リビングハット」はスプリームマスターチンハイの呼びかけに応じて大きく発展しています。これらのレストランは大人気を集め、世界各地にチェーン店があり、安くて美味しく、しかも栄養バランスのとれた、様々なビーガン料理を提供しています。人々に健康的な食生活を勧め、最も有効な温暖化阻止の道を示しています。それにより、この地球と住んでいる人々、そして生きとし生けるもの、私たちの子孫を保護し、地球温暖化よってもたらされる、絶滅的な危機を免れるよう最善を尽くしています。

この時代において、スプリームマスターチンハイは献身的に奉仕し、苦勞をいとわず、世界の人々を助け、大事な地球のために、光り輝く未来を切り開いています。

メッセージ

靈性の師であり、芸術作家でもあるスプリームマスター チンハイは、内面の美を表現することとを、こよなく愛しています。そういうわけで、彼女はベトナムを「オウラック」、台湾を「フオルモサ」と呼んでいるのです。オウラックはベトナムの古称で「幸福」を意味し、また、フオルモサの名はその島と人々の美をより完全に表しています。マスターはこれらの名称を使うことで、その土地と住人の靈性を上昇させ、福報をもたらすと感じているのです。

ビーガンのライフスタイル

スプリームマスター チンハイは講義の中で菜食について言及しています。二〇一〇年からは「ビーガン食生活」を人類の理想的なライフスタイルとして力強く、熱心に、強く推進していきます。これも博愛の精神によるもので、ビーガン生活は動物たちが受けている大きな苦しみをなくし、人々が病気による苦しみから免れるためでもあります。また二〇一〇年四月十四日からビーガン食生活を印心の条件の一つに定めています。（ビーガンとは全く動物性成分も含まれていない食べ物のことを指します。つまり乳製品、魚、鶏と卵（受精卵、未受精卵を含む）などです）



陰陽が平均していてこそ仏陀である

一九八七年十月一日 フォルモサ・台北無量光座禪センターにおいて

私はみなさんに観音法門の修行をやめたほうがいいと言いつけたいところなんです。なぜなら、観音法門を修行すると、人が私たちを怒っても、私たちはその人を怒りはしないからです。これでは不公平になるではありませんか。(笑い) たとえ人が私たちのお金を取ったとしても、私たちは喜んでそれを相手にあげます。なぜなら、私たちにとってお金はあってもなくても同じだからです。意味がわかりますか。修行すると、私たちはおそらく夫や妻に対して何とも感じなくなるでしょうし、友人に対しても同様です。食事さえ味を感じなくなるし、何かを飲んでも味を感じなくなります。これでは修行しても何の良いことがあるのでしょうか。

ですから、私は観音法門を修行しないほうがいいと思います。なぜなら、修行すると名利は気にならないし、金儲けは足りればいいのであって、心は多くを貪らず、多くても少なくても構わないのです。以前はたくさんのお金が欲しかったのですが、今はどうでもよいのです。あ

れば使いますが、なくても構いません。修行してからは、みんなが肉を食べても、私たちは菜食をするので、他人に褒だと思われてしまいます。もしみんなが菜食したら、肉屋さんはみな失業してしまうではありませんか。そうなったら私たちに「慈悲心」がないということになるのではありませんか。(笑い)

みなさんは観音法門を修行すると良いと言っていますが、私は良くないと思います。修行すると、おそらく私のようになってしまうて、人に質問されても答えられないかもしれません。先ほど、誰かが私に「仏教とは何か知っていますか」と聞きましたが、私は「わかりません」と答えました。するとまた「観音法門とは何ですか」と聞くのです。私は何も答えられませんでした。ある時、一人のお坊さんが私に下座に座るように言いました。彼は私に「あなたが言えないのであれば、禪師ではないということだから、下座に座ってもらいます」と言うのです。私も下座に移ろうと思いましたが、なぜなら、彼が言っていることは正しいからです。しかし、私は本当に大変疲れていましたので、下座に移らずそのまま座って動きませんでした。

観音法門を修行すると、のろまな人のようになってしまうて、みんなに何を言われようと構わなくなりません。弁論することもできないし、争いたくもありません。これでは何の良いところがあるのでしょうか。観音法門をまだ修行していない時は「禪とは何か。菩提を得たらどんな状況なのか。仏陀になったら、または菩薩になったらどんなふうなのか」など人と議論した

りしましたが、観音法門を修行してからはしだいに話すことが面倒になり、しかも何も話せなくなるのです。なぜなら、真実の状況は凡人の言葉では表現しようがなく、話せば話すほど真理から遠ざかるように感じるからです。以上の理由から私は観音法門を修行することは良くないと言っています。

以前、私はとてもよく食べました。しかし、今はしだいに少食になり、何も食べたくないのです。これでは観音法門を修行して何がよいと言っているのでしょうか。この娑婆世界ではみんなが食べて飲んで遊んで楽しんでいきます。違いますか。しかし、修行した後はたとえ遊びに行っても楽しく感じません。遊びが嫌いなわけではなく、遊んでもいいのですが、以前のように遊びを追い求めることはありません。おいしい物を食べる時はおいしいと言いますが、以前のようにむさぼって食べたりはしません。

修行すればするほど一般の人と違うようになるようです。私を見ればわかるように、いつも何か話したいと思えますが何も話せません。たとえ話したとしても、いつも人と相反することばかりです。これは観音法門を修行したせいです。ですから、みなさんは「観音法門を修行したらどうなりますか」と聞かないでください。何も良いことはありません。

他の法門を修行すると神通力を得られます。例えば、ちよつとしたパワーで病気を治療するとか、仏陀を拝んだり、山のお寺を参拝したり、困った時には仏陀を思い、自分を慰めること

もありません。また、逆境に置かれたり、病気になったりした時には、観音菩薩に助けを求めたりしました。しかし、観音法門を修行すると、誰かに助けてもらいたいと思わなくなり、また、助けてもらえる仏陀もいなくなってしまいます。いわゆる今まで助けてくれると思っていた仏陀はいなくなったのです。観音法門を修行するとあらゆる名利や世界、貪・瞋・痴（貪り・怒り・愚かさ）はみななくなってしまう。甚だしい場合は仏陀もなくなってしまう。これでは修行して何が良いと言うのでしょうか。これで万一孤独に陥ったらどうしましょう。観音菩薩も仏陀ありません。どう生きたらいいのでしょうか。夫や妻も私たちにとっては何の未練もなく、名利も魅力を失い、食べる物も選んだりしません。以前はあれこれおいしい物を選んだりしましたが、今は何を食べても構わないので、有る物は何でも食べます。以前は車も流行の車に乗り、飛行機も一流の飛行機を選んで乗りましたが、今はこれらの物は気にしなくなりました。

観音法門を修行すればするほど、以前の習慣がなくなり、たくさん修行するとみななくなってしまう。そして「空」さえもなくなってしまう。観音法門を修行する前はみんなと「空」の道理について議論したり、「禪」を表すマルを描いては、自分つまり「私」は禪の修行者であることを表したりしました。あの埔里（プーリ）の「大修行者」のように「あなたは何を修行していますか」と私が聞いたら、一言も言わずにただマルを描くのです。

観音法門を修行するとこのようなことができません。いわゆる「空」でさえ修行することができます。そして「禪」を表す最高の表記すら描くことができます。これでは修行しても何がいいと言うのでしょうか。(一人の弟子を指して)帰って「禪」を修行すべきです。そうすればマルが描けるようになりますよ。私について修行しても何もありません。すべてどぶに捨ててしまつて使えませし、またどう使つたらいいのかもわかりません。意味がわかりますか。ですから、修行を積み積むほど、頭が悪くなります。最高の禪でさえどう表したらよいかわからないからです。例えば、誰かが私のところに来て「禪の修行をするとすぐに仏陀になれる」と言つても私は相手にしません。なぜなら、私には仏陀すらないからです。意味がわかりますか。

ですから、私はみなさんに観音法門の修行をしない方がいいと警告したいのです。家に帰つて仏陀を拜んでください。そうすれば困つた時だけ仏陀と対話し、仏陀に助けを求め、たくさんの事を祈ることができます。そして病気の時にも観音菩薩の大慈悲の水を賜り、病気が早く治りますようにと祈ることができます。また観音菩薩の前で「もし私の病気が治つたら、願わくは、私は……」というふうに願をかけられます。しかし、観音法門を修行すると、そういうことはみななくなります。観音菩薩もいません。いかなる世俗の智慧もありません。それではどうすればいいのでしょうか。

ですから、先ほどみなさんが私に「観音法門とは何ですか」と質問した時、私は本当に答えられませんでした。みなさんをだますつもりはありません。信じてもらえますか。時には少し賢くなって答えることもあります。普段は答えられません。どう答えたらいいのかわからないのです。講義に招かれても、いつも当日何を話したらいいのかわかりません。他の「智慧」のある僧侶たちは講義の仕方をよく知っています。初めはこの事を言って、次にはあの事を言うてというふうに、事前に要綱を作成し用意しておくのです。そして一番目の話が終ったら第二番、第三番、第四番……と話していきます。

しかし、私は非常に不器用でこのようなことさえもできません。やろうとしてもやり方がわからないのです。少しでも智慧のある僧侶は一部の経典を初めから終わりまで講義できます。彼らにはたくさん資料があつて参考にできるので。しかし、私にはそのようなこともできません。もし、私に経典の話をして欲しいと言うのであれば、私は居眠りをしてしまうかもしれません。そういう場合は仏陀ばかりでなく、私までもいなくなってしまうでしょう。

ドイツにいた頃、私も時々経典を読みました。なぜなら、そのお寺ではもつぱら経典を読んでいたからです。ですから、私も毎日みんなと一緒にお経を読まなければなりませんでした。お経を読むのも悪くありません。とても響きがいいですから。しかし、ちよつとつかりする意識はそこから離れてしまいます。そういう時は誰もお経を読んでいません。意味がわかり

ますか。

読経はとても疲れる仕事です。注意力を集中して初めて読めるのです。さもないと、主人がいないのに誰が読むというのでしょうか。私は読経している人にとっても感心します。修行すればするほど、彼らに感心します。普段私は読経は良くないとか、読経は役に立たない、仏陀を拝むのも役立たないと言っています。今は違うことを言っているわけです。みなさん、面倒でしょうが今日の話を書き留めて一冊の本にまとめてください。これはとても大事なことです。

読経はとても良いことです。なぜなら必ず注意力を集中しなければならぬからです。「ハイレベル」であつて初めて読経できるのです。私は今「レベル」がないので、読経することもできなければ、あんなにたくさんさんの経典を見ることができません。なぜなら経典を見ているとみんなとつくにわかっているような感じがして、退屈してしまうからです。みなさんが何かに退屈した場合、眠くなりませんか。例えば、私は今、講義をしています。もし聞いてもわからない人がいたら、退屈で居眠りをするでしょう。わかりますか。

一部の私の弟子たちは、私の講義を聞いて退屈になった場合、座禅をします。しばらく往生して西方に行き、阿弥陀仏に会って、しばらくしてまた戻って来るのです。阿弥陀仏に会えるということはまあ結構なレベルであると言つてよいでしょう。ただ多くの修行者たちは仏陀や菩薩に会ったら、すぐに法を広めに出かけます。もし仏陀に会つても、謙虚な心がなければす

ぐに自分は偉いと思うのです。話によれば、例えば一部の人たちは菩薩に一回会っただけで、観音菩薩がある物や法器を自分に授けるのを見て、自分は大僧侶である思い込むのです。

実際、仏陀に一回や二回会ったことは大したことではありません。私のつたない観点から言えば、それは本当に大したことではありません。修行していい人でも観音菩薩を見ることがあります。一部の人たちは修行したことも、菜食したことも、仏陀を拝んだこともないし、宗教のことも何も知りませんが、印心の時すぐに仏陀や菩薩を見ることができません。

仏陀や菩薩が見えたことは初歩の体験にすぎません。大したことではありません。私はみんなに、たとえ仏陀に会って、物を授けてくれたとしても受け取らないようにと教えています。例えば、仏陀や菩薩、あるいは誰かが現れて私たちに何かを授けたとしても、私たちは受け取ってはけません。万一私たちに授記（じゅき：修行後、将来達するレベルを約束すること）しようとしても、受け取ってはけません。たとえそれが観音様であっても例外ではありません。それを受け取るとそこにとどまり、相手の奴隷となつて相手にだけ仕えることになつて、自分は観音様にはなれません。

一部の人はある程度修行を積むと、ある境界（きょうがい）にまで行くことができます。例えば、天国に行つて仙桃を食べて、自分はもう偉いと思うのです。実際、宇宙にはたくさんの境界があり、どこに行こうと構いません。とても簡単なことです。しかし、これはまだ行ける

境界があるということです。しかし、ある人はもう行ける境界（きょうがい）がないのです。どんな所もみな彼のものです。彼はどこにでも存在します。彼は一部の人のように、今日西方に行つて阿弥陀仏に会い、明日は観音菩薩に会いに行くようなことはしません。本当に修行の高い人は境界の区別などありません。彼らはどこにでも存在します。意味がわかりますか。

観音菩薩はすなわち彼であり、阿弥陀仏も彼であり、釈迦も彼であり、薬師琉璃光王仏も彼であり、毘盧遮那仏（びるしやなぶつ）もまた彼であります。毘盧遮那仏や阿弥陀仏が彼のために灌頂し、授記したわけではありません。彼自身阿弥陀仏であり、毘盧遮那仏です。わかりますか。彼はどこにでも存在します。そうなるのと彼は本当の賢者でありながら、まるで愚か者のように見えてしまうのです。なぜなら、彼には言いたいこともなく、行ける境界もなく、仏陀もありません。彼を救える人はいません。病気になる時は病気になる、頭が痛くなつたら頭痛がし、死ぬ時は死にます。彼を救う人も、彼の病気を治す薬もありません。彼の病気がどこにあるのかを検査できる医者もいません。

修行をよくやっていると見える人は仏陀や菩薩を見ることがあります。先ほど私が述べたように、ある期間修行を積むとある境界に上り、そこである仏陀や大聖人に会うことがあります。

宇宙のあるところには大勢の聖人や大修行者たちが集まって法会を行っています。もし数千年修行を積んだある大修行者がそこに行つた場合、大勢の聖人たちに歓迎されます。「某大師の

光臨を歓迎する」と書いてあり、二、三年後には何々教祖または有名な大師になると授記されると、これを聞いて彼は心の中で非常に喜び、自分には使命があると思ひ込み、帰ってから法を広め、衆生を救わなければならないと思うのです。

ですから、私は印心の時はつきりとみなさんに「それは大した体験ではなく、あるレベルにすぎないもので、それを越えなければならぬ。さもなければ、私たちはそこにとどまってしまう」と教えるのです。なぜなら、彼にはまだ「私」が衆生を救うという意識があるからです。まだ仏陀がいる、無明な衆生がいるといううちは最高のレベルではありません。

最高のレベルでは陰もなく、陽もありません。しかし、私たちは大抵の場合、陰が強すぎるか、陽が強すぎるのです。道家の太極図は半分が黒地でその真ん中に白い点があり、もう半分は白地でその真ん中に黒い点が印されています。それは陰と陽のことを説明しています。私たちの多くは陰が多く、陽が少ないのです。時には完全に陰となり陽はありません。しかし、人によつては陽が強すぎて陰はほとんどありません。

陰とは何でしょう。陽とは何でしょう。例えば、私たちはある有名な大師が大好きだとします。あまりにも好きなので、どんなことでもみな彼のためにして、非常に熱心に喜んで仕えます。こういう場合、私たちは陽です。しかし万一、次の日にその大師が私たちを厳しく叱ると、私たちは、自分は何の間違いもしていない、大師が間違つて自分たちを責めていると思うので

す。そこで悩んだり怒ったり、離れる決意をしたりします。そういう時は陰と言います。意味がわかりますか。

陰と陽、陽と陰は代わる代わるやって来たり、去ったりして、私たちを狂わせてしまうのです。私たち凡人はこの陰陽に影響されることが多いので、自主性を保ちようがないのです。陰になりたい時は反対に陽になり、陽になりたい時はかえって陰になります。しかし、仏陀や菩薩は陰陽が平均しています。わかりますか。

一部の禅師たちはマルを書くのを好みます。自分たちには陰も陽もないことを示すのです。しかし、少しつっこんで質問するとすぐに腹を立てるのです。先ほどのあの埔里（プーリ）の「大師」と同じように。私たちは陰陽を超越すべきです。それでこそ仏陀や菩薩です。意味がわかりますか。あのいわゆる禅師たちは人にマルを書いて見せるのが好きなようで、それでは道家より高いことを示します。彼らは観音菩薩を見たり、たくさんのお神あるいは過去の師を拜んだり、道徳的な行いをしたり、またはこの陰陽をコントロールしたりすることは、みなまだ陰陽の範囲の中にあると思っただけです。彼らは「私には陰陽はありません。私はすでにそれを超越しています」と言うでしょう。

このような言い方は間違っただけではありません。しかしみなさんに言っておきますが、仏陀や菩薩は陰もあれば陽もあります。彼らはそれを超越していません。陰陽の中にいながら、陰もなけ

れば陽もありません。わかりますか。陰陽を全部捨てたわけではありません。もしそれをみな捨てたとして何になるのでしょうか。全部捨ててしまったとしたら、どうしてこの体があるのでしょう。どうやって衆生を救うのでしょうか。衆生によつては、陰を必要とするものもあれば陽を必要とするものもあります。ですから、完全に陰陽を捨てるわけにはいきません。意味がわかりますか。

私には陰陽両方ともあります。もしほかに必要なものがあれば、それをもつけ加えることができます。ですから、私がここに来て甘い話ばかりしているとは思わなくてください。それはみなさんの考え方が甘いのです。それでは衆生を救うことができません。陰と陽両方を備えてこそ完璧で、衆生を救うことができるのです。

なぜ陰陽をみな備えなければならぬのでしょうか。それは人によつては叱る必要があるからです。例えば、ある子どもは優しい言葉で説明すればすぐに理解し、話を一回聞いただけですぐにやってくれますが、ある子どもは叱らなければなりません。それで初めてやるのです。わかりますか。そうだとしたら陰陽が必要ではありませんか。私たちのような凡人でさえ、子どもを教育するのに陰陽を併用しなければならぬのです。ましてや人に三界を越えることを教えるのに、陰陽を使わないでどうやってできるのでしょうか。

この陰陽は宇宙に存在するもので、私たちに利用されるためにあるのです。さもなければ、

存在しません。わかりますか。この世界において役に立たない物はありません。良くないという物も何一つありません。ただ私たちがそれらの使い方を知らないために、役に立たなくなったり、良くない物になったりするのはです。例えばある毒草があり、医者はそれに毒があることを知りながら、やはり持って帰って、他のものと混ぜ合わせて栄養剤として、人間の病気を治します。また、良い薬草であっても使い過ぎると毒薬になってしまいます。違いますか。

ですから、陰が多すぎても少なすぎてもよくありません。私たちは陰を備えると同時に陽も備えなければなりません。そして随時それを使用してこそ良いことです。陰陽を全部捨てるべきではありません。捨ててしまったら空虚になって、少しの感情もありません。もしそうなったらどうしたらよいのでしょうか。どうやって衆生の心に同情を寄せるのでしょうか。修行してからみな「空」になってしまつて、人がつらい目に遭つても何とも感じないようでは、そのような修行はいけません。あなたには何事もなくても、彼にとっては大変なことなのです。ですから、彼を思いやらなければなりません。さもなければ、仏陀になる必要も衆生を救う必要もありません。ましてや経典の話などする必要がありません。これではこの世界にとどまつて何をするのでしよう。わかりますか。

といつても、この世界もそう悪くはありません。どこの世界にしよう構いません。地獄にさえ行けるのですから、なぜこの娑婆世界にとどまることのできないのですか。この世界はこ

んなにも美しく、いろんな種類の衆生がいて、それぞれみな表情も異なり、男女もみな違いがあります。二人の女性、あるいは二人の男性でも比べて見るとみな異なります。とても面白いことです。私たちは毎日人に会い、おしゃべりをして時間をつぶし、山河を眺めたりしています。多くのことがあってみな実に面白いのです。ですから、この世界は決してつまらないものではなく、結構なものです。

宇宙には必ず一人の造物主がいます。なぜなら、すべてのものはみな誰かが造り出したからこそ存在できるのです。ですから、これらのものを造り出す専門の工場があるはずです。私たちはこのような素晴らしい体とこの世界を持っています。どうして誰も造った人がいないなんていえますか。その人というのはおそらく一種のエネルギーでしょう。私たち自身の心であるかもしれません。私たちにはまだよくわかっていませんが、この宇宙全体を造っている何かが必要存在するに違いありません。この世界はこんなにも美しく、いろんな種類の衆生がいて、樹木や石、花や草があります。これはきつと造物主のパワーが造り出したに違いありません。しかも数百億年かけて初めて造り出すことができたものです。わかりますか。

このパワー、言いかえればその人は仕事が非常に多忙で、また非常に努力しています。その人はたくさんの智慧と想像力を使ってはじめてこのような美しい世界を造り出すことができたのです。私たちはこれを楽しみましょう。たとえば自分では何もしなくても私たちは楽しむこと

ができます。例えば、私たちは毎日人に会い、山河を眺めてもお金がかかりません。この世界に何の悪いところがあるといえるのでしょうか。

もし、よくないと思うのであれば、それは私たち自身の心がよくないからです。良いものを悪く見ているのです。それでこの世界がこんなに素晴らしいのにもかかわらず、私たちはこれを破壊し尽くしています。思うままに木を切り倒し、郊外に行つて山登りをして、野外で食事をした後はビニール袋や空き缶などを捨てるので、そこは次第にゴミ捨て場になってしまうのです。これらはみな私たち自身がしたことであつて、この世界が悪いのではなくありません。

この世界がよくないのはみな人間のせいです。違いますか。本来は何事もなかったのですが、一人の人間が腹を立てて相手を殺してしまい、その結果よくなってしまったのです。先ほどまで美しかった人間が死体となつてどんどん黒くなり、血を流して横たわっています。目は吊り上がり、昨日まで美しく魅力的でみんなが好きだった目が今は無表情になつてしまいました。これはみな人間によつて金木水火土のシステムが破壊されたために醜くなり始めたのです。たとえ老人でもきちんとしている人がいます。例えば、パーマをかけるとか、クリームをつけるなどして、自分という「小宇宙」がきれいに見えるようにしています。また結婚する老人もいます。これはその人がまだ格好いいということです。その人は服を着る時、鏡の前を行つたり来たりして、納得がいくまで見て、初めて出かけるのです。

ですから、この世界はとても面白いのです。決して悪くありません。良くないとしても、それも人間自身が造り出したのです。例えば、一人の人間がへまをすると他の人が恨みに思います。違いますか。一人の人がある人の奥さんを殺し、その奥さんが恐ろしい死体となったとします。その奥さんのご主人は当然相手を恨むでしょう。「昨日まであんなに美しかった妻が、今日はこんなに変わり果ててしまつて」と思うのです。恨みの心が生じて、相手を殺してしまいます。相手の肉親はこれに納得がいかず、ご主人を殺してしまいます。ご主人側の肉親もまた相手の人を殺します。このように殺し合いをしているから、恨みは永遠に断つことができせん。

恨みの原因はみな一人か二人の人間から始まつたものです。彼らがこの世界を破壊したために、この世界は悪くなつてしまいました。例えば、ある人は陰が多すぎてよく腹を立てていると、私たちは彼を嫌つて彼と争い、彼を殺してしまうのです。世界はその時から乱れ始めます。わかりますか。

普通の人は陰気な人が好きではありません。私たちはみな陽気な方を好みます。ですから、人が笑っているのを見るのが好きです。先ほど私と会つたあの人は、陰の方に偏つていましたので、「陽」をつけ加えた方がいいのではと助言しました。彼が嫌いなわけではありません。好きだからこそ彼を助けてあげたのです。しかし、一般の人は好きでない人に対してはすぐに害

を加え、甚だしいときは殺したいと思うのです。わかりますか。一般の人は、色の黒い人に対して少しの白で染めて、バランスがとれるようにしてあげるのではなく、完全に消してしまおうとするのです。相手を助けて内面を改善させてあげようとは思わないのです。

例えば、自分の着ている服の汚れが目立っているのに、私たち自身非常に怠けていて我慢が足りないのです、その服を全部燃やしてしまうのと同じです。本来なら洗濯すれば使えるはずのもので、万一全部がきれいに洗えないようなら、他の色で染めて別のきれいな服に変えてしまおうとか、汚れている部分に二、三の大きな花模様を描き入れ、創意に富んだ花の衣服にすることができはるはずで。

しかし、私たちは大抵自分の想像力を使うのではなく、反対に大きな破壊力を使うのです。自分が嫌いな人に対してはすぐに抹殺しようとしています。すると私たちのこのようなやり方に不満を持っている人は、私たちに対しトラブルを起こします。これらすべては、私たち自身の見方が正しくないからです。

私たちから見て良くないと思う人でも、ある人はとても好きなのです。例えば、ある奥さんがいて、その人は人に嫌な感じを与える人で、彼女を好きな人は誰もいません。しかし、意外なことに彼女のご主人は非常に彼女を敬愛しています。ですから、私たちには他人を殺害する権利はありません。自分が嫌いだからといって相手に「あなたはなんでこんな奥さんで我慢で

きるのですか。私があなただの代わりに殺してあげましょうか」なんて言っただけじゃない。本当に殺したら、ご主人はもちろん悲しむし、あなたを仇打ちに来るでしょう。その時点から世界は思うようにならなくなるのです。

私たちが非常に朗らかな気持ちでいるのであれば、すべてがとてすてきに見えてきます。たとえすてきでないものであっても、すてきに見えるのです。なぜなら、すてきでないものも、それは私たちと無関係だからです。わかりますか。そうすると世界は乱れません。私たちは観音法門を修行すると非常に明るく、自在で、何も気にならなくなります。何でも構わないのです。

では、なぜ何でもすてきで完璧に見えるのでしょうか。それは宇宙の造物主の巨大なパワーは、陰を造り出すと同時に陽も造り出すからです。これらは彼の権力であり、彼が好んでやることです。ですから、たとえ私たちが嫌いな人でも、その人を自由にさせなければなりません。なぜなら、陰も陽も造物主のパワーから造り出されたものだからです。わかりますか。例えば、人形劇の場合、一人の人が後で幾つかの人形を操っています。どの人形がどんな踊りを踊ろうと、みな後の人が操るのであって、この人形が凶悪であったり、あの人形が善良であったりするわけではありません。みな後ろの監督が操っているからです。

映画も同じです。スターや俳優たちは私たちと同じように普通の人です。違いますか。私は

映画に出演したことがあります。ですから、よく知っています。私はたいしてきれいではなく、小柄で細いのですが、彼らに化粧されると、私は自分でも見違えるほどに、まるで女王のように変身しました。このように別の服に着替えて別の化粧をすると、私たちはジーンズを着ている時のように走り回ることはできません。その時、私はまだ観音法門を修行していませんでした。

化粧した後は自分が別人になってしまったような感じでした。これはあの監督が私をきれいに変身させ、私を大勢の美しい人たちと一緒に踊らせたからです。その時、私たちはみんな化粧して上品なお嬢さんや王女になり、王子や高官たちと宴会をしたのです。そのような場合は、たとえ監督の指示を受けなくても、自分で演じ方がわかります。なぜなら、その時の雰囲気は普段と異なるからです。わかりますか。みんな美しく上品なので、私も自然にそうなるのです。

ある人はいきなり凶悪な人になります。それもお化粧のせいです。化粧する時顔に黒い仮面をつけ、恐い服を着るだけで恐ろしい感じになります。ですから、舞台の上では普通の人が化粧すると、みなそれぞれ違ってきます。例えば、あなたの友人が俳優になったとして、古代の服装をし、長いひげをつけ、顔には白や黒をたくさん塗っていたら、あなたは彼のことが見分けがつかないのではないのでしょうか。そのときは悪党の役を演じているからです。

この世界も同じです。陰であろうと陽であろうと、みな造物主のしたことです。良い人も造

物主がそのようにしたのであり、悪い人もやはり造物主がそうしたのです。わかりますか。自分の役を演じ終え、劇の服を脱ぎ、化粧を落とすと普通の人間に戻るのです。意味がわかりますか。

ですから、私たちは過度に陰が好きになったり、陽が好きになったりしないことです。といっても、私たちはまだそういうことのできるころまでいっていません。観音法門を修行すると陰陽をコントロールすることができません。そうやって初めて陰陽を使うことができるのであって、陰陽に使われるものではありません。現在私たちはみな陰陽に使われています。「陰」になると、とても凶暴になり、腹を立てたりして我慢できません。そして「陽」になるととてもうれしく、または楽しくなります。

この陰と陽はすべて自らやって来たのであって、私たちが招いたから来たわけではありません。私たちは陰と陽をポケットに入れて、陰が必要な時は陰を、そして陽が必要な時は陽を取り出して使い、使いたいだけ使えるというわけではありません。お金の使い方と同じで、ある人はお金持ちでありながら、お金に縛られているために一銭も使いません。みんな銀行に預けたり、あるいは地下に埋めて土の神に見張りをしてもらったりして、自分でも使わず、父母にもあげません。

私たちも同じです。私たちが陰陽を使わなければ、陰陽に使われます。わかりますか。です

から、私たちは自分をコントロールできません。怒る時は気が狂うぐらい怒り、人を愛する時
も気が狂うほど愛します。一人の女性を深く愛した場合、気が狂ってしまうほど愛するのです。
なぜなら、その人の喜怒哀楽に左右されるからです。

観音法門を修行するとまだ喜怒哀楽はありますが、私たちはそれをコントロールできます。
修行すればするほど制御力が強くなります。例えば、二〇%制御から三〇%、五〇%、六〇%
制御などというように、これは私たちの修行の程度によって決まります。修行を積むほど制御
力のパーセンテージが上がります。私たちが完全にコントロールすることができた時が仏陀に
なった時です。

仏陀になることは大したこともありません。神秘的なこと、達成できないことでもありま
せん。なぜなら、私たちにはすでに陰陽が備っているからです。わかりますか。外へ行って買
ってきて使うというものではありません。私たちの内面には何でも揃っています。陰もあれば
陽もあります。それを使うことさえできれば大変素晴らしいことです。

さて、ひとつ普通の例えを話して、みなさんに理解していただきたいと思えます。例えば、
時にはおとうさんやおかあさんは、決して本気で怒っているのではないのですが、子どもが甘
いものを食べ過ぎていたりのをみると、歯が痛くなるのが心配で、必ず子どもを叱ります。ある
いは外で遊び過ぎて宿題をしなかった場合は、怒ったふりをして、家に帰らせ、腹ばいにさせ

てお尻をたたくのです。お尻は肉が厚いので、たたいても大丈夫な場所であることを知ってたたくのです。けがをすることはなく、ただ少し痛くなるだけです。

これは決して子どもをむやみにたたっているのでもなく、怒っているのでもありません。本当に怒ってむやみにたたいたのだとしたら、コントロールできずに、子どもを見るなりたたいたはずです。本気で怒っているのではないので、場所を決めてたたくのです。またどこをたたけばあまり痛くなく、けがをしないのかを考慮に入れているのです。毎日子どもに甘い話ばかりして、溺愛したら、かえって親の言うことを聞きません。ですから、時には硬い方法で対処しなければなりません。硬いというのは硬い頭の「硬い」という意味ですが、陰陽の中の陰とも言えます。わかりますか。

仏陀や菩薩も同じです。陰陽を全部捨てるべきではありません。仏陀や菩薩はすべてを備えています。なぜなら、衆生がたくさんいて、それぞれ異なるプレゼントを必要とするからです。もし仏陀や菩薩に何もなかったら、何を売り物にしたらいいのでしょうか。ですから、陰陽を全部捨てるべきではありません。例えば、一人の裕福な人がいて、家にはすべてが揃っていて、何でも買って来て使うことができますが、彼は大きな市場を開いたとします。何でも売っています。彼がそれらのものを必要だからではありません。彼はすでに十分に裕福で、自分は何も必要としません。もし何か必要なものがあれば、人に買ってきてもらうことができます。彼は

人々の便宜を図るためにその市場を開いたのです。

同じように、仏陀や菩薩は衆生から離れることはできません。仏陀の心とは衆生の心です。菩提は煩惱で、煩惱は菩提です。ただ仏陀や菩薩は煩惱を菩提に変えます。わかりますか。もしみなさんがそのような人間になりたいと願うのであれば、観音法門の修行をお勧めします。

今、私は観音法門を修行すると良くない点をみなさんにすべて話したつもりですが、ご自分で選択していただきたいと思います。なぜなら、観音法門を修行すると何も良いことはありません。福德も神通力もありません。たとえあつたとしても使えません。修行が上達していくためには神通力を使つてはいけません。観音法門を修行する人は神通力で人の病気を治すことさえ許されません。何もないのです。

これでも修行したい人はいますか。どれぐらいですか。(ある人が答える…家族のことを片付けてから修行に来ます) 私はみなさんに、決して家庭や子どもと別れたり、子どもの世話をしたりしないようにとは言っています。本当に頭の悪い衆生ですね。みな修行などやめなさい。みなさんはまだ悟っていません。仏陀や菩薩さえ人を変えることも、人に影響を与えることもできないのですから、どうしてみなさんが人に影響を与えることができるのでしょうか。人はそれぞれ自分の因果があり、それぞれ自分の路を歩くのです。意味がわかりますか。

釈迦は最も慈悲深く最も善良な人です。しかし、それでも彼のいとこのデーヴァダッタは釈

迦を殺そうとしました。ですから、あなたはどうかやって自分の子どもに影響を与えるのでしょうか。我執がこんなにも強いようではどうやって観音法門を修行するのでしょうか。もしあまりたくさんの方を考えるようでしたら、修行しない方がよいでしょう。

あなたが何も考えず完全にマスターを信じ、マスターに言われた通りするようになったら、その時に来てください。意味がわかりますか。今はまだ執着心が強過ぎ、我執もまだ強く、それをなくすことができないのです。世間のことはずっと気になって、世間がマスターより大事で、子どものことがマスターあるいは解脱することより大事なら、修行しない方がよいでしょう。たとえ今あなたが修行したいとしても、私は受け入れません。このような人を弟子にしたら、私に迷惑ばかりかけるでしょう。

ですから、昨日私はみなさんに草刈りをやめさせました。なぜなら、私たちの山は誰でも行つて草刈りをしてよいところではありません。印心した人だけが行けるのです。長い間菜食をし、身・口・意（行動・言葉・考え）がきれいで、そしてよく修行している人だけが行けるのです。印心した弟子でも自分勝手に私に会いに来たり、供養したいからといって勝手に供養しに来たりすることはいけません。もし供養したいのであれば、毎日何時間座禅し、観音を何時間しているのか、進歩があるかどうかを必ずはっきり説明しなければなりません。

印心していない人でも私に会う時は同じです。私はざつくばらんすぎます。ですから、みな

さんは来たい時に来て、見たい時に見て、習いたい時は習い、やめたい時はやめるのです。みなさんはまだ印心してなく、講義の時だけ来るのですから、しばらく受け入れたものといっている、比較的ゆるやかにしているのです。私の弟子に対してはかなり厳しいです。もしあなたがまだ子どものことを考えて、後で修行したいと思うのであれば、何も考えなくて結構です。修行する必要ありません。帰ってよく子どもの世話をした方がいいでしょう。

私たちは過去の世々代々において、すでにたくさんの子どもを世話してきました。来世もう一度来る時にもまた多勢の世話をする子どもがいるでしょう。甚だしいときは今よりもっと多いかもしれません。世話する子どもがいらないのではないかと心配する必要はありません。マスターに出会えないのではないかと心配する方が正しいことです。

子どもは世々代々いつもいます。大変多くの私たちの仇（かたき）が、そこで私たちの子どもになるうとして待ち構えているのです。そして私たちにお金や時間、私たちの身体的な気力を使って世話させるのです。私たちが借りたすべての因果を取り戻すまで離れません。もしかしたら非常に早く私たちを離れて行くかもしれません。四才とか六才あるいは十才で離れて行くことがあります。そうなると私たちは非常に悲しみ泣きます。自分の子どもが行ってしまったと思うのです。本当は私たちは喜んで「私の仇は行ってしまった。これでだいぶ自由になった。こんなに早くこのカルマを清算できたことを、仏陀や菩薩に感謝します」と言わなければ

なりません。

しかし、この世界はすべてが本末転倒しています。私たちは最も大事な事を大事ではないと思ひ、最も大事でないことをかえって大事にします。それで私たちは夫や妻、子どもを最も大事なものと思うのです。それらを軽んじるべきだとは言いません。やはり彼らをよく世話しなければなりません。なぜなら、過去世において私たちは彼らに借りがあるからです。今はそれを喜んで返さなければなりません。精算するのを後悔したり、悩んだりしてはいけません。意味がわかりますか。ただ彼らは私たちの究極の目的ではありません。それらを究極の目的とするのは本末転倒であり、間違いなのです。

ですから、私たちは世々代々輪廻して、彼らの靴下やパンツを洗い、お金を稼いで、彼らを食べさせているのです。ずっと今でもなお喜んでこれらの中に未練を持っているのは、この道理がわかっていないからです。わからないということとは「無明」であり、わかれば「仏陀」です。これは非常に区別しやすいことです。

仏陀と衆生とはほぼ同じです。こちらへひっくり返すと仏陀であり、そちらへひっくり返すと衆生です。衆生も、もともとは仏陀なのです。ただ自分が仏陀であることを知らないだけです。ちようど、王子が小さいときは自分が王子だということがわかりませんが、大きくなって初めてわかるようなものです。わかりますか。

どうしてそんなに笑うのですか。来世にまたやって来てパンツなど洗いたくないということですね。みなさんよく注意してみるとわかると思いますが、人生はまるでラバのようです。自分の面倒を見るだけでもこんなに疲れているのに、その上、妻や息子や娘まで世話しなければならぬのです。ラバと同じように、自分で草を探して食べなければならぬ以外に、たくさんの人間が彼にくれるものを背負い、重い負担に耐え忍ばなければならぬのです。牛や馬も同じです。あんなにも大きく重い車を引かなければならぬのです。意味がわかりますか。

この話を聞いてわかった人で、私が話している道理が好きな人は残ってください。前は私は気軽に印心してあげましたが、今は少し厳しくしなければなりません。なぜかという、多くの人は君子のように約束を守りません。彼らはここに来て法を学ぶのではなく、法を盗むのです。法を学ぶ時は私に一生菜食すると約束しますが、家に帰っては肉を食べるのです。これはいけないことです。重いカルマを造って解脱できません。

私はもう自由で寛容すぎることはしません。今は彼らに願をかけてもらいます。昔地藏菩薩があのような願をかけたのと同じようにしてもらいます。こうして初めて彼らも大切にするでしょう。聞くところによると、ある宗教は弟子たちに願をかけるよう要求するそうです。例えば、これから世々代々離れませんか、誓いを立てて願をかけさせるのです。私はそんなにたくさんのものを要求しません。現世だけでもう十分です。どうして世々代々離れないことを

要求するのでしょうか。現世だけ離れなければいいのです。以後は上の世界に行って二度と戻って来ないことです。マスターにいつまでも一緒に縛られる必要はありません。ですから、世々代々離れないなど言ってはいけません。みなさんは早く離れるほどよいのです。早くマスターになり、自在になりなさい。私に世々代々縛られることはありません。たとえみなさんがそうしたくても、私は嫌です。

人に縛られることはとてもつらいことです。弟子に縛られることはなおさらつらいのです。なぜかと言うと、彼らのカルマがみな私のところにやって来るのです。時には私は選択して受け取らないカルマもあります。しかし、彼らがあんなにも苦しんでいるのを見るのが忍びなく、代わりに受け取ってあげるのです。意味がわかりますか。ですから、弟子に縛られることは本当に嫌なことなのです。

私たち大多数の人は意志がとても弱いのです。これも習いたいあれも習いたいと思うのですが、それを完全にマスターするまで続けることができません。例えば、以前は医者になって患者を苦痛から助けてあげたいと思いましたが、一年か二年勉強しただけで大変だと感じるのです。そこで心の中で「彼らが病気になるのは彼ら自身のこと、なんで私がこんなに苦勞しなければならぬのだろう」と思うのです。そういう時、彼のレベルは永久にそこにとどまってしまう。

修行をする人も同じです。印心を受けることはとても簡単です。マスターを探し当てさえすれば印心できます。悟りを開くこともとても簡単なことです。マスターを見つけてさえすればできるのです。しかし、問題は私たちが引き続き悟りを開いていくことができず、その開いた「悟り」にカビがつき、毎日その手入れをしないことです。これこそが一番難しい事です。

守るべき戒律もないがしろにし、今日マスターに印心を受けたくなったからといって慌しくやっけて来て、自分は必ず菜食し、これは問題ないと保証しておきながら、家に帰って奥さんが菜食を作ってくれないとすぐに口実をつけて肉を食べるのです。私たちの意志が強ければ、奥さんは私たちの事に強く干渉したりしないでしょう。父母も干渉しないでしょう。なぜなら、私たちは人間は話をする事ができるからです。言葉というものはあまり力はないかもしれませんが、意志疎通の道具にできます。私たちは相手を尊敬し、優しく、かつ確信をもって彼らと話し、討論できます。今日話をして、相手が受け入れなかったら、明日また話するのです。

孝行するということは、親に毒薬を渡されたら、決してそれを飲むということではありません。また父母が肉を食べるように強制したら、すぐに私の指示を忘れてそれを食べるといふことではありません。実際、みなさんが肉を食べることは、私とは関係のないことです。しかし、多くの衆生たちはあなたが仏陀になって救ってくれるのを待っているのです。多くの豚や牛、鶏やアヒルは、あなたが肉を食べることをやめるのを待ちわび、少しでも長く生かして欲しい

と思うのです。人類がみな菜食すれば、多くの動物たちはきっと喜び、歌ったり踊ったりして、私たちが好きになるでしょう。そして私たちがどこに行っても、彼らは私たちに近付き、私たちになつくでしょう。わかりますか。これが観音法門を修行する人の「無畏を施す」ということです。衆生に恐怖心を感じさせないことです。

「無畏を施す」とはどういうことでしょうか。それは衆生に「無畏」を布施するということです。「無畏」とはこわくないと言う意味です。私たちは無畏を施して衆生を安心させるのです。そして彼らに「もう心配いりませんよ。今日から私はみなさんを食べたりしませんからね。長生きしてね」と慰めなければなりません。もし私たちが長寿を全うしたいと思いつながら、一方では、衆生を殺して食べても構わないと思うのであれば、これは因果の法則に違反するものではありませんか。そのような因を作るので、果があるのです。私たちが短命の因を作っているのであれば、どうして長寿の果があるのでしょうか。

不老長寿でいたければ観音法門を修行すべきです。もちろん肉体が長生するということではありません。なぜなら、この肉体は大したものではないからです。私たちは肉体以外にもっと美しく自在で、追い求めるに値するもう一つの体があるからです。その体こそ私たちが慈しみ、大切にするに値するもので、それこそ不老長寿でいることができるのです。この肉体は服と同じで、時間がたつと必ず脱がなければなりません。この服を脱いでこそ、私たちは真の自由にな

なることができるのです。ですから、この肉体に愛着することはありません。

例えば、犯人がいたとします。彼は何十年も鎖に縛られ、あるいは首かせをかけられていました。何十年の間、彼はすっかりこれに慣れてしまい、誰かが彼に「あなたはもう自由になりました。もう帰ってもいいですよ。今すぐこの首かせをはずしますからね」と言うと、その犯人はかえって、きつと違和感を覚えると思います。そして「もう何十年もたつたから、私は慣れました。今、突然この首かせがなくなったら、私はどうしたらいいのでしょうか」というふう

に思うのです。

また長い間とても暗い部屋に閉じ込められていた犯人は、外に出て太陽の光を浴びると、一日か二日間、目が見えません。ですから、あまり長い間、閉じ込められていた犯人に対しては、彼に自由を与える前に、まずどこかに一定の期間住んでもらって外の生活に慣れてから、そこを離れるようにしなければなりません。違いますか。なぜなら、彼は小さな家での生活に慣れてしまつて、外の複雑で、大きな空間には恐怖を感じるのです。私は決してふざけているわけではありません。これは心理的な問題で簡単なことではありません。

同じように、みなさんは印心を受けることも、悟りを開くことも問題ありません。私がいれば悟りを開くことができます。問題はみなさんが自在な状況に慣れるかどうかです。ある人はずいぶん前に自由になったにもかかわらず、まだ自分が犯人だと思つて、いまだに自分は自由

の身であることが信じられないのです。そして相変わらず恐怖心や劣等感を持ち、人が自分に親切にしても、彼はそれを不親切だと思ったり、あるいは自分を見下していると思ったりするのです。

昨日、私は一人の犯人と会いました。彼はこう言うのです。彼は以前たくさんの殺生をしたので、もともと無期懲役の判決を受けたのですが、後に監獄で修行を始めて、現在はずで自由の身になっています。しかし、彼はまだみんなが彼のことをよく思っていないと思込んでいて、みんなが彼を犯人扱いしていると思っっているのです。

実際、彼自身の心はまったく開かれてなく、非常に恐れていて、卑屈になっているからです。社会全体が彼を排斥し、決して彼をよく思っていないというわけではありません。彼には奥さんと子どもが一人いて、奥さんは彼のことがまだ好きです。好きでなかったら、どうして彼と結婚して子どもを生んだりしますか。彼にはまだ友達もいて、いつも彼を食事に連れて行ったり、彼が病気になった時、友達が見舞いに来て一緒にいてくれます。どうして彼を愛していないなどと言えるのですか。それでも、彼自身の心は自分を許すことができないのです。

同様に、悟りを開くことは問題ではありません。問題はみなさんが、私に印心を受けてから、直ちに自分の無明の荷物を捨てることができるか、毎日それを首に掛けていないでいられるか、ということですか。わかりますか。私が、あなたは今日悟りを開いたと言います。口で言うだけ

でなく、みなさん自身も悟りを開いた体験をしますし、直ちに証明が得られます。

しかし、おそらくあなたは信じないでしょう。帰ってからまだ毎日無明の荷物を抱えて、それを枕にして眠り、印心の時の開悟の状況を忘れてしまい、自分に仏性があることも忘れてしまふのです。それを磨くことをしないでだけでなく、カビを生やしてしまうのです。毎日無明の荷物を磨いているばかりで、修行を続けようとも、この宝石を大切にしようとも、それを捕まえておこうとも、きれいに洗おうともせず、隅っこに放り出してしまつて、反対に毎日石ころと遊んでいるのです。

みなさんは知っていますか。子どもが遊ぶ時泥をビズケットに見立て、木の葉をお金に見立てて遊ぶことを。もし、そういうものをあげないと機嫌が悪いのです。もし、私たちが「これは本当のお金ではないのよ。帰ってからお母さんがあなたに本当のお金をあげるわ」と言ったとしても、その時は遊びに夢中で、お母さんが本当のお金をあげて、何か買って食べなさいと言つても、おそらくお金はポケットにしまつて、偽物のビズケットと遊び続けるでしょう。この意味がわかりますか。

お父さんやお母さんは当然子どもにお金をあげることもできるし、本当のビズケットを買つてあげることもできません。問題は子どもがそれを使えるか使えないかです。あるいはその物があるかないかです。おそらく、子どもはポケットに入れるだけで、忘れてしまい、二、三

日たつたら腐ってしまうでしょう。この意味がわかりますか。

同じようなことで、みなさんはすぐに悟りを開くことができます。間違ありません。悟りを開くことは最も簡単なことです。私は悟りを開くことほど簡単なことを今まで見たことがありません。私は世界三十数ヶ国を旅行しましたが、買物することさえ、そう簡単でないと感じています。時にはある食べ物がまずくて食べられないので、他のものを買に行っても長い間待たなければなりません。普段私たちは物を買いたいと思つたら、まず苦勞してお金を稼がなくてはなりません。それで初めて自分が欲しいものを買えるお金が貯まるのです。買ったとしても気に入らないこともあります。なぜなら、外見は良くても使いにくいからです。

気に入った、ぴったりの服を着たければ、やはりまずお金を稼がなければなりません。それで初めて布地が買えるのです。買って帰つて来てから、まだ随分待たなければなりません。洋服屋さんは時間が空いたら仕立てくれるのですが、時には二週間でできると言っていたのに、三週間たつて電話して聞いたら、まだできていませんと言うのです。

私たちが外出して買物するのもそんな簡単ではありません。お金があつても同じです。その場所に欲しいものがなかった時には、何軒かお店を回つて初めて気に入ったものを買えるのです。ですから、買物は悟りを開くことより、早く簡単ではないのです。悟りを開くことはこの世で最も簡単なことです。唯一、簡単でないところは、引き続き發展させ、ますます悟りを開

いていくこと、引き続き私たちの仏性を認識することです。多くの人は少しばかりの仏性を認識しただけで、すぐそれにカビを生えさせたり、印心後はもうやることはなくなったと思ったりするのは、これは誤った考え方です。大切にすることを知るべきで、それでこそ初めて印心できるのです。

印心する前にまず自分にはつきり聞いてください。「自分がここへ来た目的は何か。解脱するためなのか。それとも、ここに遊びに来たのだろうか。好奇心で、マスターがどんな法門を教えるのか知りたいからか。聞くところによるとマスターの教え方は他の人と違って、レベルも他の人とは違うようだ。マスターのレベルは一体どこに達しているか推し量ってみるために来たのか」と。

みなさんには測ることはできません。私にはみなさんに推し量られるところはありません。一人の人に何もなしとしたり、みなさんはどうやってその人を測るのですか。レベルもないにどうやって比較できるのですか。わかりますか。私にはレベルもなければ智慧もあります。この点については、私は先ほどはつきりと話しました。私は決して自分は非常に多くの智慧があると誇張して言ったりしていません。自分が大智者であるなどとも言ったりしていません。人によっては、自分は「大知識」だと言ったりします。しかし、私は少しも大きくありません。ですから、みなさんが私を呼ぶ時は「大きくないマスター」「智慧のないマスター」「無名のマスタ

―と呼んで結構です。

無名の「無」は何もないという意味であり、「名」は名前です。無名とは、決して名前がないという意味ではありませんが、名前がないと言ってもいいでしょう。このようなわけで、当然測ることはできません。レベルがあるから初めて測ることができるのです。一つの場所も周囲に境界線があるから測ることが可能なのです。私は自分に何があるのかわかりません。私は本当に何の智慧もありません。

みなさんが私に会いに来る時はいつも、自分の「プレゼント」を持ってきます。ただ、ある人のプレゼントは白かったり、ある人は黒かったり、ある人はおいしかったり、ある人は苦かったり、ある人は大きかったり、ある人は小さかったりします。いずれにしろ、みなさんに贈りたいプレゼントです。私もみなさんのプレゼントにより、縁に応じて反応して、みなさんに見せています。従って、私の講義を聴きに来て、ある人はこの一部分だけを理解し、ある人はまた他の部分を理解するだけです。または、その部分だけしか聞いてなく、帰ってからその部分だけを記憶していて、その他は全部忘れてしまっているのです。わかりますか。

なぜなら、みなさんはそのプレゼントを持って来て、後でまた持って帰っているのです。私はただ開けてみなさんに見せてあげるだけです。私には何もありません。一枚の鏡のようなものです。もし鏡をここに置いていたら、どんな人でもここを通る時、みんな自分の本来の姿

を見ることができると、自分の顔とか外見とかを見ることができるとしよう。鏡は話をしません。また、決まった同じ形を示すこともありません。私たちがどのようなであろうと、鏡はそのまま写し出すのです。

講義の前は、私は何を講義するのか自分でもわかりません。講義が終わったら、今何を講義したのかも覚えていません。みなさんは信じないかもしれませんが、これは本当のことです。私は中国語がわからないので、弟子が「即刻開悟の鍵」を本にした時、本の中で何が語られているのか全然知らなかったのです。弟子たちが何回も読んで聞かせてくれましたが、読んでもらうたびに新しく聞くのと同じ感じでした。私は他の人に「この話は素晴らしいですね。私はどうしてこんな話かうまいのでしょうかね」などと言ったりするくらいです。

というのは、私は「無所住（心は執着するものがない）」ので、私には智慧がありません。観音法門を修行したら、大智慧が得られるだろうと思わないでください。始めたばかりの頃は得られるかもしれませんが、その後はなくなってしまう。智慧もなくなり、仏陀にもなれません。なぜなら、たとえ仏陀になったとしても、自分が仏陀であることがわからないのです。覚えていないのです。しかし、ある人が「あなたは仏陀です」と言ったら、おそらく少し思い出して、心の中で「仏陀とはおそらくこんなものかな」と思うことでしょう。

一昨日、私が宜蘭から帰ってきた時は夜遅くなり、夜中の一時過ぎごろでした。その時間は

もともと餓鬼が物を食べる時です。しかし、山道を歩いてきたのでおなかの具合がよくなり、帰って来たら、おなか为空いた感じがしたのです。どうしたらいいでしょう。餓鬼のことは気にせず、おなかですいたから何か食べたいと思いました。みなさんは、私がおなかですいたら、たくさん食べると思うでしょう。そうでしょう。実際は、私は一口、二口食べたなら食欲がなくなり、もう食べたいとは思わないのです。

その時は少し味付けにと思って、自分で香菜（中国パセリ）を少し加えてみましたが、足りなかったのもう一度取りに行きました。台所に行つて香菜を取つて来る時、私は突然手を止めて、これが仏陀の生活なのだろうかと心の中で思いました。多くの人が私は仏陀だと言うので、私はたいへん驚き、仏陀がどうしてこんなことをするのだろうか、と思いました。早朝一時か二時に帰つてきて、おなかですいて、そして香菜を探して食べるのです。心の中でこれはなじみのない仏陀（中国語で陌生仏）だなと思つたのです。おそらく今後私たちは「南無陌生仏」と唱えることになるでしょう。（笑い）

その時私はとてもなじまないと感じたのです。しかし、本当になじまないものではありません。ただあの感じは口には言えないものです。私はそばにいる弟子に「仏陀の生活は本当にこんなものなのだろうか」と聞きました。彼女は下手な返事をしました。「そう、そうです。これこそ仏陀の生活です」。私が何を言おうと、彼女にしてみれば、みな間違いないことであり、私がする

ことはみな正しいことなのです。ですから、彼女はこんな様子がすなわち仏陀だと思ったのです。彼女はさらに私を慰めて言いました。「あなたは本当の仏陀です。なぜなら、今日会ったあの殺人犯のような人ですら、あなたに会うと、感動して悟りを開くこともできたからです」

しかし、私は「仏陀」など何も感じませんでした。仏陀など何もありません。意味がわかりません。麵を食べる時は食べるだけのことで、「仏陀」が食べているという感覚はまったくなく、食べる時は食べるだけのことです。

もし、みなさんがそのような状態が心配だったら、観音法門を修行しないでください。なぜなら、修行してから自分が誰だかわからなくなり、人々があなたに「あなたは仏陀です」と言っても、あなたはわからず、自分はまだ以前と同じだと思ってしまうからです。もし今誰かが「あなたは仏陀です」と言ったら、あなたは必ず「冗談でしょう」と言うはずで、それで、私がみなさんに「みなさんはみんな仏陀です」と言ったとしても、みなさんも信じないでしょう。

たとえ少しばかり理解したとしても、完全には信じられません。そうではないですか。自分が仏陀であると完全に信じられる人はいますか。もし、いたら立ってください。私に礼拝させてください。(笑い)

みなさんは観音法門をたくさん修行すると、同じように他の人に崇拜され、「在世仏」と呼ばれます。しかし、あなた自身は特に感じるところはなく、信じないわけでもなければ、信じる

わけでもありません。知らないわけでもなければ知っているわけでもありません。

みなさんはまだ覚えていると思いますが、達磨が梁武帝と会った時のことです。梁武帝は達磨が自分のことをどんなに立派で大したものであるか、無限の功德があるかなど賛美するのを待っていました。結局何も褒めなければかりか、ただ梁武帝に「お寺を建てたり、僧侶に供養したりしても何の功德もありません」と言いました。その時梁武帝は大変悩み、彼に「あなたは誰ですか」と質問しました。たぶん当時、梁武帝は禅問答の修行をしていて、「私は誰なのか」という禅問答をしていたのだと思います。それで、達磨に「あなたは誰か」と質問したのでしょう。達磨は「私は知りません」と言いました。おそらく彼はその時頭が空っぽになっていたと思います。多く修行すると、何もかもみな忘れてしまいます。彼は自分が誰であるかもすでに忘れてしまっていたのです。

達磨大師は決して彼をだましたわけではなく、また冗談を言ったわけでもないのです。面倒くさくて話をしなかったわけでもありません。達磨はうそをつけないのです。彼は本当に知らなかったのです。それで、知らないと言ったのです。その時、梁武帝はその「知らない」というレベルがどういふものなのか理解しようもなく、彼は単なる凡人なのだと思います、帰ってもらいました。達磨が帰ってから、梁武帝は他の人に聞きに行き、あの「知らない」という人は、結局のところどういふ人なのかを確認しようとしたのです。他の人は「あなたは知らないのです

か。彼は大変な悟りを開いた人ですよ」と言いました。そのとき、梁武帝は後悔して、すぐに人をやって追いかけてきましたが、他の人は「今、彼を追いかけても無駄です。彼は帰って来ません。たとえ全世界が彼に頼んでも彼は帰って来ません」と言いました。本当におかしなことですね。彼自身は知らないのに、人々はみな彼が誰であるかを知っていたのです。達磨は本当にかわいいですね。

私も自分が誰であるのか知りません。しかし、多くの人々がやって来て、私のことを証明しようとしています。ある人は、私は金剛王仏だと言います。ある人は古仏だと言います。しかし、あまりにも古いため、いまだかつて見たことがなく、聞いたこともなく、それで名前が何なのか知らないのです。また、ある人は、私は琉璃王仏だと言う人もいます。ある人は、私の体からたくさんの手が出て来たのを見て、私が千手千眼観世音菩薩だと言う人もいます。ある人は、私が地藏菩薩だと言う人もいます。また、ある子どもが私に質問しました。「マスター、あなたは大勢至菩薩ではないのですか。なぜなら、私には智慧があるからそのように思ったのです。私を文殊様だと言う人もいます。なぜなら、私には智慧があるからそのように思ったのです。私が思ったわけではないのです。私の体からすごく大きな光の環が出ているのを見た人もいます。彼らはみんな見ているのです。みんな私が誰か知っているのです。しかし私自身は知りません。」

私は素直にみなさんに言います。決して冗談ではなく、また達磨と比較するわけでもありません。

せん。私に言わせれば、彼も別にどうということはありません。私はみなさんに、私は達磨と同じだと強調するわけでもありません。そんな意味はありません。なぜなら、彼は彼、私は私で、彼とレベルを比較する必要もなく、彼が仏陀になっても、私は別に構わないのです。彼が宇宙で最高であっても、私には関係のないことです。

しかし、正直言って私は彼のことを理解しています。なぜなら、現在私も自分が誰か知らないからです。比較しているわけではありません。この意味がわかりますか。多くの人がみんな、私は誰か知っているのですが、ただ自分だけが知らないのです。こんなことはすべてあの観音法門を修行したために起こったことです。もし、みなさん心配なら修行しないでください。

以前、私は自分が菩薩の化身だと感じていたころがありました。なぜなら、私はあんなに良かったからです。私は布施もでき、忍辱もでき、謙遜もでき、肉食もしました。しかし、観音法門を修行してから私は思いました。「牛、馬だって肉食している。肉食できたからと言つて別にそんな大したことでもないじゃないか」。布施もお金がたくさんあるから布施ができるのです。おそらく、私は以前に人から借りていたのでしよう、その人を見たらすぐ返したくなるのです。先方がまだ口も開かないうちに、私はもう返したいと言っているのです。これは先ほど私が話した、仇が母胎に入つて私たちの子どもとなるのと同じ意味です。わかりますか。

みなさんは私の話を信じないかもしれませんが、みなさんはここへ真理を聞きたいと思つて来

たのですが、真理は往々にして「忠言耳に逆らう」です。みなさんも、もし耳に逆らうと感じるのであれば、ここに綿があるから耳を塞いでもいいですよ。（笑い）今さら塞いでも遅すぎますね。これから先、私たちが講義をする前に、まず綿をみなさんに配っておくべきですね。聞きたくないところはすぐ耳を塞げばよいので、そうすれば、私たちも誤解をさけられ、みなさんも不愉快な思いをせずにすむし、私のことを怒ったりもしないでしょう。聞くところによると、お坊さんを怒らせると福報がなくなるそうです。これは聞いた話であって、私は少しもそんな感じは持っていません。今、何か問題はありますか。怒りたいことでもいいですよ。それも私へのプレゼントの一つだと思えばよいでしょう。

問 観音法門を修行するには、どんな心の準備をすれば、修行がうまくいくのでしょうか。

答 本来に生死を解脱するためであれば、それで十分です。それこそが最大の心の準備です。本来に解脱を求め、仏陀になろうとするのであれば、観音法門を修行すべきです。しかし、おそらくあなたは修行してからは仏陀になりたいとは思わないでしょう。

問 初めてマスターにお目にかかった時、心からマスターを崇拜しました。マスターの本も読みました。しかし、まだ悟りを聞いていません。私は菜食していないので、カルマが大きすぎ

るからでしょうか。

答 私たちの思いは非常に強く、何かを思えば、それを得られるのです。それで、「一切唯心造（すべては心で作られる）」というのです。修行すると私たちの思いはさらに強くなります。なぜなら、私たちは自分自身のこのパワーを使うようになるからです。悟りを開くとはこのパワーを開くことなのです。それからは毎日そのパワーを使うことができます。その時私たちの身・口・意（行動・言葉・考え）はみな清浄でなければなりません。そうでなければ、私たちがそんなにも強いパワーがあつて、よくないことを思つたら、さらにまずいことになるのではありませんか。意味がわかりますか。

もし、その時に私たちが人を殺したいと思つたら、刀はいりません。その人はそれで殺されてしまいます。従つて、修行する人に最も重要なことは身・口・意をきれいにすることなのです。私がみなさんに菜食しなさいと言うのはみなさんの慈悲心を養わせるためです。みなさんのパワーが大きくなってから、それを良い方に使えるからです。例えば、私たちがトラを子ども頃から飼つて、毎日肉を食べさせていると、大きくなって、万一食べる肉がなくなる日が来たとしたら、トラは誰を食べると思いますか。そのトラは人間を食べるでしょう。なぜなら、肉を食べるのが習慣になつていてからです。私たちがトラの慈悲心を養うことをせず、毎日豆腐やグルテン（タンパク質）を食べさせてなければ、当然肉を食べるのに慣れてしまいます。

ですから、釈迦は「座禅して修行する人は、菜食しなければ仏陀になれない。最高でも魔王にしかなれない」と言っています。魔王になれるのであれば、すでに立派なものです。なぜなら、魔王は三界では非常に高い地位だからです。彼は三界以内のことをコントロールしていて、三界以内の国王だからです。

魔王は最高で梵天の地位に達することができます。パワーは非常に大きく、神通力も不可思議です。しかし三界を超えることはできません。なぜなら、慈悲心が足りないからです。陰陽もよく学んでいないので、まだ陰が多すぎ、陽が非常に少ないのです。差があるといえば、そこです。わかりますか。ですから、なぜ菜食しなければならないのか、と私に聞かないください。みなさんが三界を超えるには必ず菜食しなければなりません。慈悲心は非常に大切なものです。もし私たちにパワーがあっても慈悲心がなければ、私たちはそのパワーを乱用するでしょう。私の言っている意味がわかりますか。

背が高く、大きくて、大変な力持ちに育った人が、非常に凶悪であるのと同じように、そのような人は社会に対して、大変危険な人になります。背が高く、大きく、その上力持ちの人がいたとして、しかも反対に非常に慈悲深い人だったら、彼は必ず多くの人を助けることでしょう。彼は、彼の肉体の力で人を助けて、物を持ってあげたり、道路を直してあげたり、大変重い荷物を担いであげたりして、たくさんの人を助けるでしょう。しかし、もし彼に慈悲心や博

愛がなかったら、力で人を殴ったり、殺したりするでしょう。これではさらにひどいことでは
ありませんか。

もし軟弱な人だったら、悪い心を持つていたとしても問題ありません。なぜなら、彼が人を
殴っても、かゆいところをかいたのと同じぐらいのことで特に大したことではありませんから。

問 もし、印心してから毎日二時間半座禅できなかつたらどうすればよいのでしょうか。

答 それなら修行しないほうがいいです。本来に誠心誠意であるなら、必ずできます。睡眠を
少し減らし、テレビを見る時間や、新聞を読む時間を少し減らし、電話やおしゃべりや友達と
会うことを少し減らします。このようにすれば毎日相当多くの時間が節約できます。わかりま
すか。一度に続けて二時間半座禅する必要はありません。朝少し早めに起きて夫と子どもがま
だ起きて来ないうちに一時間座禅して、夜一時間遅く寝て、座禅します。昼の休憩時間にさら
に三十分座禅すればいいのです。

みなさんはいつも女性的感情で私に質問しますが、ここへ来るからにはもつと厳肅になつて
ください。くだらない問題を質問して、私の時間と活力を浪費しないでください。私はみなさ
んと遊んでいるわけではありません。もちろん時には遊んでも結構です。しかし、修行の問題を
質問する時はそのようではいけません。

問 私は肉を食べるのが大好きでした。食べずにはいられなかったのです。しかし、マスターの本を読んでからは、肉を見ると吐きたくなくなります。これはどうしてでしょうか。

答 怪人（マスターの冗談）に変わっておめどう。すでにみなさんに話した通り、観音法門を修行することは大変危険なことです。あなたはまだ修行していないのに、私の本を見ただけなのに、もうそんなに危険になっています。修行したら野菜ですら食べたくなき恐れもあります。肉どころではありません。ですから、修行しないほうが良いでしょう。（マスターの冗談）楞嚴経の中で釈迦が言っています。「どんなものであるかとそれを食べる時は、我が子の肉を食べるのと同じように思わねばならない」（楞嚴経四巻）彼が言っている意味は、僧侶や修行者は、たとえ野菜を食べる時でも自分の子を食べるような思いで口にしくく、ましてや肉を食べるなんて、ということですよ。わかりますか。

本当に修行を深めると、たとえ野菜でも食べたくなくなります。なぜなら、彼らにも生命があるからです。ただし、生をむさぼり死を恐れる意識がうすいので、食べる時、そんなに苦しまないのです。

どんなものもみな仏陀です。ですから、私たちが野菜を食べるのも仏陀を食べることです。先ほど私は人形の話をしました。野菜は一種の人形です。宇宙には一種の大いなるパワーがあつて、それはすべての衆生を照らしています。すべての衆生を成長させ養っています。もし、

この大いなるパワーがなければ衆生も存在しません。それで、私たちはいつも「仏光は常に照らす」と言います。仏光とはすなわちこの大いなるパワーを指しています。もし、私たちがこの大いなるパワーを見なければ、光として見る事ができません。もしこの仏音を開きたければ、一種の超世界の音に変わります。いわゆる「世間の音に勝る音」です。意味がわかりますか。

このパワーが植物に達したとき草木となります、一個の体に達したとき人間となります、動物の身の上に達した時は豚や鶏やアヒルなどになります。従って、植物も当然このパワーから造られたものであり、ただ表面が異なるだけの事です。表面が異なる包装をされているので、見たところ違ったものに見えますが、実際の中味のプレゼントはまったく同じものなのです。例えば、中秋の節句の時、私たちはたくさんプレゼントをします。買ったものは同じでも違った包装紙で包むので、見た目は違ったものに見えますが、実際は開けたら中味はみな同じです。

従って、野菜も神であり、仏陀です。造物主のパワーでもあります。何か特別なものはないのです。悪人もこのパワーが彼を激しく動かしたからこそ、そのように悪くなったのです。言いかえれば、悪人もこのパワーが造ったものなのです。

例えば、二人の人がいて、一人は善人で、一人は悪人の場合、もし二人が同じ時間に死んだとしたら、その時誰が逃げられるでしょう。彼ら二人の体は同じようになり、座ることもでき

ません。たとえ、善人だからといって座ることができるわけではないのです。その時善人、悪人、二人はどこへ行くのですか。大いなるパワーのところへ戻るのではないですか。大いなるパワーには陰陽があり、陰のものは陰の場所へ行き、陽のものは陽の場所へ行くのです。どこへ行こうと、いずれもすべてこの大いなるパワーの中にいるのです。意味がわかりますか。

私と同じです。私は上には頭があり、下には足があります。頭も足もみな私のものです。みなさんは「私たちが尊敬しているのはマスターの頭だけだから、あなたの足は、私たちが切ってもいいですか」などと言うことはできません。見映えはよくないけれど、それでもそれは私のものです。わかりますか。私のおなかの中は当然見映えがよくないですが、それだからといって、「マスター。あなたのおなかの中はすごく汚い。私たちがそれを取ってしまいます。私たちが尊敬しているのはあなたのおなかの頭だけですから」などと言うことはできません。

なぜなら、私は物を食べるのにまだ必要だからです。おなかがあれば、私の食べた物はどこで消化するのですか。例えば、別荘は当然きれいです。でも、中にはトイレもあります。みんながトイレで眠るわけではありませんが、私たちにはそれが必要なのです。

従って、陰陽はいずれも良いのです。悪人も善人もみんな良いのです。鬼も良いし、魔も良いし、仏陀も素晴らしいのです。意味がわかりますか。しかし、みなさんは仏陀になりたいから、修行する必要があるのです。仏陀になりたくなければ、魔になっても良いのです。それは

それで役に立つのです。なぜなら、地獄の人は魔が来て早くカルマをきれいに洗い流してくれることが必要だからです。例えば、服が少し汚れている時は、水で洗えばそれでいいのです。

しかし、本当にすぐく汚れている時は粉石けんを使って、二、三日水に浸しておく必要があります。もし、それでもまだ洗ってきれいにならない場合は、においが臭くて手でさわると皮膚がむけそうな漂白剤に浸す必要があります。そのようなひどく毒性の高い化学洗剤を使って初めて黒く汚れたところを洗い落とし、衣服を白くできるのです。そのようなものは飲んだら中毒しますし、好んで飲む人は誰もいません。私たちは毒の強いものは高い所において、子どもが触れないようにしますが、漂白剤は役に立つもので、一番汚れている服をきれいに洗うことができます。

地獄も同様に、みな私たちを手助けしてくれるものなのです。しかし、私たちは慎重であるべきで、地獄に行つてきれいに洗うなんて面倒なことをする必要はありません。現在一人のやさしい在世のマスターを見つけてゆつくりと洗つた方がより楽です。もし、魔が来てから洗うとしたら、おそらくそんなに良いものでなく、非常に苦痛でしょう。

問 大修行者はどうして凶悪な猛獣を非常におとなしくさせることができるのですか。
答 これは大変簡単なことです、それは磁場の問題です。なぜなら、どんな衆生にもみんな仏

性があります。仏性を完全に発展させた人は、衆生の仏性を引出すことができるのです。ですから、その時トラは自分がトラであることを忘れて、ただ仏性を表すだけなのです。どんな衆生にも仏性があり、もし仏陀の心で犬を見るなら犬も仏陀であり、先ほど私が話したように、大修行者には分け隔ての心がありません。

広欽老和尚は非常によく修行して、少なくとも阿羅漢のレベルでした。野獣を降伏させることができ、ライオンやトラが子猫や子犬のようにおとなしくなり、彼をとても尊敬しました。牛頭法融禪師が牛頭山で修行している時、付近に野獣がたくさんいて、至る所にうろろろして、蛇も這いまわっていました。少しも彼を傷つけることがなかったのです。これは彼が少なくとも阿羅漢のレベルに達していたことを表しています。

私はおそらくまだそのレベルに達していません。なぜなら、蚊も私を刺すからです。もちろん、蚊が来たらいつも刺すわけではないのですが、刺したい時に刺すのです。私も彼らの勝手にさせています。わかりますか。阿羅漢のレベルまで修行するとわかるのですが、動物はあなたに大変敬服します。小鳥やサルが花や果物を持ってきてあなたを供養します。これは、阿羅漢のレベルの最も特別なところで、阿羅漢の特色といってもよいでしょう。

以前、ある人がいて、彼は大変よく修行をしており、山の上に住んでいました。小鳥が花や果物を持ってきて供養しました。しかし、ある一定の時間修行してからはなくなりました。

なぜなら、小鳥は彼がどこにいるかがわからなくなったからです。彼の「存在」がどこにあるのかわからなくなったからです。それで物を持って来て供養しなくなったのです。決して彼のレベルが落ちたわけではありません。

問

先ほどマスターの講義を聞いていて、あなたに学ばなくてはならないと感じています。マスターは蚊があなたを刺すとおっしゃっていますが、先日「白宮」の小部屋で講義を聞いていた時、私は気がついたのですが、蚊はあなたを刺さないでみな私たちの方に来て刺していました。

答

みなさんのような多くの菩薩が来てくれて、私を助けてくれたのです。菩薩を刺すとより福報があるので、私のような凡人には構わなかったのです。菩薩の血を刺して吸えるのはたいしたものです。それで、玄奘が西方へお経を取りに行った時たくさん鬼や魔が彼を殺して、彼の肉を食べようとしたのです。聞くところによると、菩薩の肉を食べると長生きでき、たくさん神通力と福報があるそうです。

あの日は、みなさんたくさんの方が来て蚊も忙しく、今までにあんなにも多くの菩薩が来るのを見たこともなかったのです、すぐにみなさんを刺したのです。私は毎日同じところに住んでいるので、ある時は刺されたり、ある時は刺されなかったりします。凡人を刺しても彼らには

何の助けにもならないので退屈していたのです。それで、みなさんが来たら蚊は急いでチャンスを捕えて刺したのでしょうか。

あなたが私に学びたいというのもよいでしょう。ただあなたにわかってもらわねばならないのは、私も蚊に刺されるし、薬も塗らなければならぬということです。病気になったら、自分で治すことはできません。漢方医に脈をとってもらったり、西洋医に採血検査をしてもらったりします。その結果、彼らはみんな言います。「あなたは病気ではない」。しかし、私は病気で大変苦しいのですが、誰もわからないのです。ですから、私は「私は病気です」とは言いたくないのです。なぜなら、誰も信じないし、医者もみんな「病気でない」と報告するからです。しかし、私は確かに病気で、ただ、私だけがわかっていて他人は信じないのです。

みなさんは修行したら、蚊にも刺されないし、蛇にもかまれないし、トラがやって来てあなたに帰依し、供養するなどと思っただけではありません。私について修行する場合、こういったものを欲張ってはいけません。あなたにもこのようなことが起きる可能性は大いにありますし、またはないかもしれません。これは必ずというわけではないのです。蚊と同じで刺したければ刺しますが、私に「刺しますよ」と声をかけたりはしません。

観音法門を修行するということは、このように不思議なことなのです。自分が阿羅漢なのか、菩薩なのかもわからないし、自分のレベルがどこなのかもわかりません。修行してから、達磨

のように変な衆生になるかもしれません。他の人が「あなたは誰ですか」と彼に聞いても、彼もわからないのです。もし、これを「禪」を長年修行した人たちに聞いたら、このような問題に対しては必ず回答をするでしょうし、または何かを描いて人に自分のレベルをわからせるでしょう。または、「カルマは本来と空なり、衆生は本来有なり、色即是空、空即是色……」などと奥深い禅語を唱えたりするでしょう。人はそれで初めて彼のレベルがどんなものかを知ることになるのです。

観音法門を修行する人にはこんなことはありません。私もみなさんにそのようなものを教えられません。従って、みなさんはおそらく観音法門に失望するでしょう。わかりますか。もちろん、修行したら収穫があります。ないことはありません。もし、ないのであれば、私たちは何の必要があつて修行するのですか。なければ損です。私たちの宇宙にはあんなにも多くのものがあるのに、修行しても何も得られないのであれば、これは損をすることではないですか。

当然、修行すべきものはあります、ですから、それに基づき修行するのですが、話すことはできません。人に見せることができないばかりでなく、どんなものか描いて見せることもできません。みなさんは禅宗の十牛図を知っていますか。第一図は牛を探し、第二図は跡を見て、第三図は牛を見るのです。ただし、そのようなものは私たちにとってまったく役に立ちません。従って、私はみなさんにはつきり言っておかなければなりません。みなさんも、まずよく考

えておかなければなりません。私がみなさんをだましたなどと言わないことです。修行したらトラがやって来て頭をなでしてくれるというようなことはありません。トラを見たらすぐに逃げべきです。(笑い) あるいは直ちに反応すべきです。トラがやって来て頭をなでしてくれるのを、そこで待つてはいけません。危険すぎます。修行が高くなれば動物が来てあなたと親しくなるなんて思つてはいけません。そんなことはありません。動物はあなたの肉のにおいをかいでやって来るのですから。(笑い) 蚊の一番多いところで修行しようなどと冒険をしないようにしてください。二、三日も修行したら、骨だけになってしまうでしょう。(笑い)

観音法門の修行はとても普通です。自分のことをよく面倒見なければなりません。毎日おいしいものを食べ、冬には暖かい服を着、夏には薄着をすることです。食事も栄養のある、高タンパク質のものを食べるべきです。観音法門を修行したら、決してこの体がどうでもよいということではありません。わかりますか。

人によってはおそろくまだわかつてないでしょう。まだトラの頭をなでたいなど思っています。私はトラがいるところには住めませんからね。(笑い) 万一、ある日トラが自分の仏性が見えず、ただ自分のおなかだけが見えたとして、そこに私が座つていて、やさしそうなのを見たら、いとも簡単に私をおなかの中に入れてしまおうでしょう。そうなったらどうしましょう。(笑い) それで私は深山で修行したくないのです。トラにかまれるのが怖いからです。(笑い)

問 私は一冊の禅宗の本を見ましたが、作者が言うには、悟りを聞くのは大変難しいことで、たくさんの大師が一生涯学んでやっと悟りを聞くとのこと。教えてください。悟りを聞くときみな「空」になってしまおうのですか。

答 もし、何も考えないのであれば、それでは石ころになるのと同じではないですか。もともと、たくさんのものがあるのに、修行したらみな空になるのでは損ではないですか。そのような僧侶の話は聞く必要ありません。彼らは修行したらみな空になると思っています。もしそうなら、私は修行しません。それでは損ですから。私たちはもともと智慧があります。どうして空になるのですか。石ころも空なら、それでは私たち自分自身を失うことになりません。

（禅師は常に「雑念を絶ち」、でたらめなことを考えてはいけません。頭をゼロに帰すべきだ、と私たちに教えています）ゼロに帰ってはいけません。ゼロに帰るとはこの意味ではありません。ゼロはこの「道」を指しているのです、「空」で何も無いということではないのです。ゼロは本来の姿を指しており、源の意味です。その源にいる時には、私たちは分け隔ての心もなく善悪を区別しません。雑念をなくそうと思っても、そんなに簡単ではないです。ゼロに帰れという意味は、私たちに観音法門を修行しなさい、という意味なのです。観音法門を修行する時、私はみなさんが源に帰るよう助けるからです。その時が本当の「安心」なのです。このようなことは、言葉では話しようがないですし、また、話すことはできません。

問 私はマスターに学びたいと強く思っています。ただ、私の家のことをよく処理してからマスターに学びに来たいのですが、よろしいでしょうか。

答 誠心誠意なら構いません。そうでなければ来ないでください。誠心誠意でなければ、私はあなたを追い返すでしょうし、その時あなたは悩んで怒るでしょう。ですから、まず誠心誠意かどうか自問すべきです。直ちに私を信じなさいということではありませんが、誠心誠意に道を求めるべきです。先ほど私が話したことを、どうしてあなたはすぐに信じられるのでしょうか。体験があつて初めて信じ、体験がなければ信じる必要はありません。たくさん見て、たくさん聞いてから初めて信じることができるのです。私の本をたくさん読んで、同感できるかどうか自分に問いなさい。修行してから、体験が得られ、進歩もあり、大変うれしく思い、利益があつて、智慧も開いた時初めて信じられるのです。ただし、誠心誠意であるべきです。

誠心誠意と信じることは同じではありません。しかし、みなさんが誠心誠意に道を求め、生死から解脱するために来るのであれば、私を信じなさい、と無理強いしません。誠心誠意とは自分に対してであり、信じるかどうかは、修行してからでよいのです。直ちに信じるべきだということではありません。わかりますか。

まだ物を買っていないし、使ってみてもないのにどうして信じることができるのですか。買って帰って使つてわかるので、確かに良いものだなと思つたら初めて信じられるのです。一般

の人は無理に信じさせようとします。天国と地獄があることを、阿弥陀仏がいることを、観音菩薩がいることをあなたに信じさせようとします。にもかかわらず、少しの体験もあなたに与えないのです。あなたは観音菩薩とは何かもわかりません。観音菩薩の少しばかりの光ですら体験できず、仏音も聞けないのに、これでは何を信じると言うのですか。私は絶対に無理やり信じさせることはしません。ただ、誠心誠意に道を求めて来るべきです。

問 お尋ねしますが、出家者をどのように呼べばよいのでしょうか。

答 あなたがどんな呼び方をしようが構いません。礼儀はそんなに重要ではありません。なぜなら、あなたの心は本当に無礼ではないからです。一般の人は出家者を僧侶と呼びます。ただ、マスターあるいはチンハイと呼んでも別に構いません。呼び名は特に重要なことでなく、あなたの真心が最も重要なのです。

問 私はある法門にかかわったことがあります。やはり光を見て、音を聞くことを教えるものです。マスターが教えているものと非常に似ています。

答 たとえあなたが印心しなくても構いません。あなたの法門を引き続き修行するのも良いことです。私は無理強いしません。ただ、あなたに話して聞かせているだけです。本の中にもあ

りますが、ある師もよく似た法門を教えていました。しかし、実際はまったく違うものです。そのような師はオウラック（ベトナム）にはたくさんいます。アメリカにもいます。インドだけでも二、三種類あります。見たところ「あまり大差ない」法門のようですが、実際はまったく違うのです。私が教えているのは最もオリジナルで、最もはつきりした、最高の法なのです。彼らは別のところから法門を盗んで持って帰り、むちゃくちゃに教えているので、教えてもはつきりせず、また教え方もよくありません。彼らは半分しか教えなかつたり、一部分だけ教えたりして、一〇〇%教えないのです。従って、弟子はその後引き続き修行することができません。例えば、万一教える人が死んでしまったら、あなたは引き続き修行することができません。なぜなら、彼は第一歩はどうすべきかだけを教えて、第二歩はどうあるべきなのかを教えてないからです。わかりますか。

現在のインドにもそのような不完全な教え方があります。あるものは、マスターが非常に厳しいので、弟子をテストするのです。弟子に完全なものは教えていないのです。しかし、真に偉大な仏陀や菩薩はそんなことにはこだわりません。あなたが修行してもしなくても、一〇〇%あなたに伝えます。その後あなたが修行しなくても、あなたに対して何もしません。しかし、一部分しか教えなくて、万一師が死んでしまったら、あなたはどうやって引き続き修行したらよいのかわからないでしょう。

以前、インドに一人の師がいました。彼はたった一句しか教えませんでした。例えば、あなたは第一世界の蜜語（真言・マントラ）だけしか教えません。その他の第二、三、四、五、六、七、八などの世界については何も話しません。弟子の修行が第一世界のレベルに到達したら、再び彼を訪ねてきます。その時に初めて、第二世界の蜜語を教えるのです。彼は規則を非常に厳格に定めていたのです。

ただ、弟子がまだ第二世界に達する前に師は往生してしまったので、弟子は再度生れ変わって来て、他のマスターを探して修行しなければなりません。しかし、このマスターも彼には完全な内容を告げず、ただ、彼が第二世界へ到達したと告げただけで、彼がまだ修行をよくしてないうちに、その師がまた往生してしまったので、その彼はまた生れ変わって、他のマスターを探して修行をすることになりました。そして、最後にとうとう私の師のところへやって来たのでした。

これは最近の話で、十数年前のことにすぎません。その彼は、私の師に対してこう言いました。「マスター、今回私は完全な地図が欲しいのです。半分なんていりません。一部分でもいりません。私はすでに二回生れ変わってきています。毎回師はほんの少ししか教えてくれず、まだ学び終えてないうちにその師は往生してしまうのです。だからお願いです。完全に私に伝えてください。万一あなたが往生されても、私が引き続き修行を続けられるように」と。

時には、私も大変な挫折を感じることもあります。なぜなら、人々はこの優れた修行方法について感謝しないばかりか、誹謗し、カルマまで造るからです。けれども、私は引き続き一〇〇%法門を伝えていきます。それは非常に誠心誠意な人がいるからです。法門を全部伝えれば、万一明日師がいなくなってもみなさんは修行が続けられます。半分だけ伝えて、マスターが行ってしまったら、みなさんは必ずもう一度生れ変わって来なければなりません。なぜなら、法門の全部がなかったら、あなたは三界を超えられないからです。

ある師は同じことを講義しますが、ただまず教理を教えるだけで法を伝えることはありません。毎月あなたに講義録を一部送付してあなたが理解するのを待つのです。二年たってから初めて法を伝えるのですが、伝える時にはただ一句を教えるのです。私のように、人々を一世で解脱させて永遠に戻って来ないようにするために、公に一回で全部教えてしまうのではなく、ありません。